

幼保連携型認定こども園 開地保育園

保育園情報

- 園の所在地：都留市小野623
- 代表者氏名：亀澤 正隆
- 電話番号：0554-43-3647

活動場所

- 森のほいくえん
- 近隣県を含む地域の自然（山・川・湖・海など）

活動のねらい

森のほいくえんは、子どもたちが没頭するフィールドとなり、そこに無限に広がる遊びと発見がまた、

子どもの創造性と可能性を育てています。ここをもとに、それぞれの活動の役割があります。

- 子ども：「おもしろい！」「不思議！」「知りたい！」からたくさんの『気づき』を得る。気づきから学ぶ。
- 保育士：子どもの「おもしろい！」「不思議！」「知りたい！」に創造をふくらませることができることで、子どもの『気づき』をサポートし、学びに広がりを持たせる。子どもの学びに広がりを持たせるために地域に協力依頼をし、学びを考える。
- 地域：森で楽しく遊び、学ぶためにはルールがあることを、森の専門家の方々に教えてもらう。正しい自然への理解を遊びの中から学ぶこと、これが子どもたちへの環境教育となる。これは保育士と子どもに関する情報共有が必須であり、この情報をもとに学ぶフィールドの基盤を専門的な視点で構成する。



あそびがまなび

の保育を...



① 森のほいくえんでツキノワグマの目撃情報あり！

監視を設置して状況確認！！



子どもたちが登る山。安全管理のため、実際にツキノワグマがいるのかカメラをしかけて 観察することにしました。子どもたちと一緒に動画を見てみると、そこには何種類もの野生の動物が確認されました。

映像の視覚的効果

全員で同じものを見ることで、適切な情報やイメージを共有できる。
そこから考え、創造し、探求する気持ち生まれ、それがディスカッションにつながり、ディスカッションをすることで「気づき」が促される。
子どもの育つステップを構築する大切な場面かもしれません。

おまけ

カメラの動画には映っていなかったけれど
動物園では“ツキノワグマ”も
しっかり見えました！



② 監視カメラから見えてきたものは・・・？

監視カメラで撮影された動画を、子どもたちと一緒に見てみました。

ある動物をみて「これはシカだよ！」という子どもたち。

「シカ」という発言を受容する保育士。

「シカはピョンピョン跳ねないよ。あれはカンガルーだよ！」という子どもたち。

この発言も受容しています。

2つの答えを受容した保育士は「さて、正解はどちらだろうね？」

と問いかけます。

「本当に動いているところを見ないと答えがわからない！」

「よーし！シカなのかカンガルーなのか、動物園にいつて動いているところを見て、確認してみよう！」ということで、動物園に行く計画が練られました。





③いざ動物園へ！正解は見つかるのか！？

さて、子どもたちは期待をふくらませながら、いざ動物園へ！
子どもたちは園で見た動物の写真を持ち、いざ**カンガルー**の前に！
「あれ、もりにいたどうぶつはしっぽがこんなにながくないよ？
もようもちがう！」

そして**シカ**を見に行ってみると…

「なんかいてるけどもようがちがうな～。やっぱりこれじゃないか～」
としよんぼり。

では、子どもたちが映像で見た動物は何だったのでしょうか？

そう、シカだったのです。

では、なぜ、子どもたちは「シカ」だと気づけなかったのでしょうか？

実は、映像に映っているものは夏に撮った映像。本物を見に行ったのは秋。シカの毛は夏毛から冬毛に変わっていたため、模様が変わってしまっていて、わからなかったのです。



④子どもたちの興味の広がり

動物園に行ったので、森のほいくえんでのいろいろな記憶をたどりながら、その他の動物も観察してみました。

子どもたちがじっと見つめたのは、ネズミやモグラでした。

普段は見る事ができないけれど、森の中で活動の形跡や痕跡を知っていた子どもたちは、本物に出会ったことで、もっともつこの動物たちを知りたくなりました。

いつも一緒に森のほいくえんで活動してくれる学芸員のばんちょにアドバイスをいただき、モグラを見られる装置を森に設置してみたり、モグラが出てきたときに食べられるようにと餌を持って行ったり…動物園に行った後は、そんな子どもたちの姿がありました。



「モグラの部屋」なるものを勉強中！



／モグラを見られる装置を設置！＼

環境教育へ・・・

子どもたちの「本当を知りたい！」から始まった動物園訪問。

「本物」を見ることでよりリアルを知ることができました。そして、動物園に行ったことで、

森のほいくえんでのこれまでの自分たちの経験が新たな興味につながり、学ぶ機会をくれました。

子どもたちが納得するまでじっくり観察することで、共存する生態を知る機会を得ることができたのです。

そして、ここで学んだことが、次の森のほいくえんへの活動に生かされる…これが「環境教育」となるのです。



子どもたちの気づきや育ち

『見えない自然』ここに、子どもたちの楽しみと不思議が隠されており、これが子どもたちの創造性と可能性をふくらませてくれるのだと思います。大切なことは「気づき」であり、正解を知ることではないのです。また、その活動に必ずしも正解は1つだけではないという柔軟性を持つことが、学びの広がりにつながります。

さらに大切なことは調べるといこと。このプロセスを体験して学んでいくことなのです。

決められた活動を行うことが自然体験なのではなく、子どもたちの「おもしろい！」「不思議！」「知りたい！」が、次の自然体験への好奇心につながっています。

宝の山ふれあいの里・ネイチャーセンター キュレーター 佐藤 洋さんより

■ 自然資源と保育の融合と保護者や地域との調和

自然体験プログラムというカテゴリは手段、つまりプログラム内容に視点がいきがちであり、何をした、何ができた、出来なかったという一定の評価がされる時代があった。

森のようちえんが日本に訪れ（2005年）、第一次ブームには公的もしくは社会福祉法人格を有す保育園・幼稚園の指導スタイルが揶揄または中傷された年代があった。その背景には、しっかりと組み込まれた保育内容、保育士と幼児との関係性は一方的で対話がそこになかった。従うことが良しとされ、統一された一斉保育、全体的に「まとまっていること」が評価に直結していた。その評価は子供たちの評価ではなく、指導者評価へと直結していた。

一斉保育を否定しているわけではなく、一斉保育は必要でもあるし、その必要性の理由は今は問わないこととするが、一斉保育による子どもたちの「発育・発達」への効果が測定されていないこと、幼児期における「生命の維持と情緒の安定」の中の情緒の安定の部分が森のようちえんとの指導スタイルとの格差を生んでいたものと分析している。

しかし、2018年の保育指針ならびに幼児教育指針の大幅な改定・認定こども園制度導入ならびに第二次森のようちえん到来に伴い、法人格を有す園での自然資源を活かした体験活動は全国へと広まっていったことに間違いはない。

その一助を受けたひとつが開地保育園である。市域・県域でも森のほいくえんなどの体験活動や保育の在り方を実践する姿は、賛否あるにせよ、公的機関や社会的にも一定の評価を受けていることは間違いはない。

今回山梨県のホームページにて紹介されている自然保育活動について言及してみたいと思う。なぜ、子どもたちの疑問や好奇心に園長はじめ保育士や地域の人間が寄り添い・待つことができるのだろうか？という事が言及または下学する大切なところである。これまでの街の評判は、「開地保育園のようなことはむずかしい（抽象的に聞こえるのが実際）」「なぜ、あそこまでできるのか」という近いようで遠い存在の園であるから言及もしくは下学する価値がある。読み手にも価値観が育まれといった構図がみえる。

この構図を見開いていくと、保育士の育成がみえてくる。決定や選択権は保育士にあり、コンプライアンスは園長ほか管理職が担保する。会議のスタイルは、課題解決型ならびにブラッシュアップ制度、子どもの捉え方が固執な方向へ向かえば、管理職や同僚からの「なぜ？なんで？」根拠を示す激しくも人を育てる要素の一つ、「考え・待つ」こと教える言葉が並ぶ。

時代に即し、スマートフォンを活用した保護者やクラス間連携、園での会話は年功序列ではなく、互いの特性や特質を理解した適正配置がされていると見受けている。職員会議は、提案性もあり、今後やるべき保育の在り方や保育資質の確保を学ぶ保育士たちの苦悩が見え隠れする。大切なことは「考えること」とあるように、価値を磨き続けるために、保育士たちがおかれる環境は子どもたちと変わらないのである。

だからこそ、森の整備委員会の外部講師たちからの突拍子もない発言にも、当たり前のように聞いていられる。日常の保育園暮らしのなかで「合意形成・敬意・尊重・受容・社会的意義・社会福祉法人としての役割・ブラッシュアップ・フィードバック・PDCA・アクティブラーニング・毒親・リフレクション・評価などなど」に対策し対応しながら、細かな対処を積み重ねている賜物がひとつの事例となりえるのである。

必然、そんな保育士と毎日触れ合う機会のある子どもたちの価値観から培われる思考や行動、言葉は幼児期にとって最低限必要な没頭や規律や規範を担保することとなる。これが社会福祉法人の役割、自然資源と保育の融合と保護者や地域との調和ということに枝葉のように分結する新たな構図を形成することになる。